

学校教育高度化センター主催シンポジウム

社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーション

—理念と方向性—

進行 小玉 重夫（センター長・基礎教育学コース）・大桃 敏行（学校開発政策コース）

研究科長挨拶 市川 伸一（教育学研究科研究科長・教育心理学コース）

話題提供 佐藤 学（教職開発コース）

根本 彰（生涯学習基盤経営コース）

下山 晴彦（臨床心理学コース）

星加 良司（バリアフリー教育開発研究センター）

村石 幸正・福島 昌子（東京大学教育学部附属中等教育学校）

指定討論 金森 修（基礎教育学コース）

市川 伸一（教育学研究科研究科長・教育心理学コース）

まとめと閉会挨拶 今井 康雄（東京大学教育学部附属中等教育学校校長・基礎教育学コース）

日時 2011年12月10日(土)

午後1～5時

会場 福武ホール・ラーニングシアター

趣旨説明

小玉 重夫

（センター長・基礎教育学コース）

今年度から、科学研究費補助金基盤研究Aで、学校教育高度化センターが中心になり、東京大学教育学研究科として「社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーションの理論的・実践的研究」を始めました。3年間で次期の学習指導要領改訂も視野に入れながら、学校教育における新しいカリキュラムのあり方を、カリキュラム・イノベーションという形で理論的・実践的に研究し、成果を出していきたいというのが、われわれが現在考えている研究プロジェクトです。本日のシンポジウムも、そうしたカリキュラム・イノベーションの理論的・実践的研究へ向けての理念と方向性を少し出し合って議論を深めていきたいという趣旨で設定させていただきました。

従来の特に教科を中心としたカリキュラムは、大きく見ると、アカデミズムが頂点にあって、高

等教育における学問体系を高校、中学、小学校と下に降ろしていく型の構成が採られていました。それが今日の社会と学校との関係において、必ずしも有効性を持たなくなっているのではないかと。具体的に言うと、政治、あるいは経済、あるいは職業を中心とする市民社会生活との関連を欠くという問題、すなわち本学の本田先生の言葉で言うと、社会的レリバンスを欠くという問題点をはらんでいたのではないかと。戦後型のカリキュラムは、学校の中で伝達される内容と、子どもたちが学校の外に出たときの社会生活との関係を、もちろん視野には入れていたと思いますが、どちらかと言えば、そのつながりよりは、むしろ教科内容そのものを体系的に教えていくというところに力点がありました。そのために、社会や政治に対してイノセントな状態で社会に送り出すことが学校の役割であり、しかもそのことは社会的にもある程度奨励されていたという状況が高度成長期ぐらいまではありました。

しかし1990年代以降、そういうシステムがかな

り壊れてきています。従って、90年代以降の新しい社会と学校との関係の組み替えを考えるためには、社会的レリバンスを有する学力へと、学力観の転換を図る必要があるのではないかと。これが、私たちが考えているカリキュラム・イノベーションの一つの前提的な問題意識です。

そこで、どうやってこのカリキュラム・イノベーションを行っていくのか。一つは、カリキュラムの内容面、教科内容そのものにかかわる内容の組み替えを含む再吟味が問題になります。これについて、この研究では、基幹学習、生き方の学習、そして社会参加の学習という三つのユニットを作って、それぞれ内容を吟味していこうとしています。もう一つは、カリキュラムを実施していくためのシステム、学校づくりや教育行政を含めた改革が必要になってくるので、それについては総括ユニットを設けました。特に本学の場合には教育学部の附属中等教育学校がありますので、ここの連携を図り、同時に、先進的实践校や教育委員会との連携も図りながら、カリキュラム・イノベーションを可能にする学校のガバナンス、学校の経営の仕方、あるいは学校づくり、それから教育行政のあり方などの条件を探っていきたいということです。この二つの柱を両輪としながら、3年後には少し具体的な形で、実践を含めたカリキュラム・イノベーションの方向性を示したいというのが、現在、私たちが取り組んでいる研究の概要です。

本日は、それについての理念と方向性を、佐藤先生、根本先生、下山先生、星加先生からお話しいただき、同時に、附属中等教育学校からも村石先生と福島先生にご報告をいただこうと考えています。本日の話の中で、恐らく議論になるであろう一つのポイントは、カリキュラム・イノベーションの前提として、学校の教員と、学校の教員以外の専門職（スクールカウンセラー、学校図書館にかかわる人たち等）とのコラボレーションをどのように図っていくのかということです。併せて、

カリキュラムの内容が、従来型の下に降ろしていく型から、社会的なレリバンスを有する型に変わっていくことが具体的にどういうイメージで想定されるのかという辺りについても議論が出てくるかと思います。それについては、最後に金森先生と市川先生からコメンテーターという立場で、それぞれの報告を構造化してコメントをしていただき、それも含めて一緒に議論していただければと思います。

研究科長挨拶

市川 伸一

(教育学研究科研究科長・教育心理学コース)

今日はお忙しいところ、たくさんの方に来ていただきまして本当にありがとうございます。今回はかなり大型の科研で、本研究科の教員20名以上が絡んでおります。半分以上が、この科研の中で「社会に生きる学力形成」ということを研究していくということです。これだけ大きなプロジェクトが動いたのは、基礎学力というテーマでの21世紀COE以来ではないかと思えます。私たちも、今回のテーマは研究のための研究で終わらせたくない、机上の空論と言われたくないという気持ちで臨んでいます。このようなカリキュラムにしたらいいいのではないかと、単に提案するだけ、あるいは何か実証的な研究をするだけではなく、実践を伴った提案にしていきたいということです。

今日は附属中等教育学校からもお話があります。一つのフィールドはもちろん附属ですが、それ以外の多くの学校、小学校も含めてということです。今日は中学、高校の先生が多いかもしれませんが、今度のカリキュラム・イノベーションは小学校も射程に入っています。小・中・高の学校とも連携しながら実践付きのカリキュラム提案をしたいというのが今回の趣旨です。そのキックオフに当たるようなシンポジウムではありますが、私たちがどのようなことを考えているのかというお話を聞